やわらぎ

森野　水琴

女は良き伴侶となる男を探している。

女は大学を卒業して就職し、事務員となったのだが、半年ほどして秘書室に異動になった。同期のみならず、先輩の女子社員からも羨望のまなざしで見られた。社長の長男に見初められたのではと、まことしやかに噂された。

秘書室の人員は室長だけが男性で、あとは女性が三人となっている。社内では女性三人のうちの誰が社長の長男と結ばれるか話題になっている。そのように見られるのが馴染めずに前任者も退社したらしい。

女は慣れない秘書業務に励みながらも、社長の長男の人となりを見極めようとしている。

社長の長男は社長付きの役員待遇になっている。

毎日、役員受付に挨拶して、専用の個室で執務している。

女が受付担当の時か、お茶を出す時、社長の長男と言葉を交わすことになるが、次期社長にふさわしい帝王学を修得している品のある言葉に聞こえた。

先輩秘書が自分こそ伴侶に選ばれたいと競うのも当然だろう。

女はその競争には参加しないことにした。ふたりの先輩秘書は安堵した。

女は大学を卒業して半年ということもあって、焦って伴侶を決める必要がない。たとえ玉の輿に近い環境にいたとしても。

秘書室長の家は社長の家と隣同士である。

秘書室長は社長の長男より一歳年上で、社長に頼まれて社長の長男の家庭教師をしていた。家庭教師といっても受験勉強ではなく教養を高めるためである。

社長の長男の一歳年下の長女も一緒に習い、大学を卒業してから秘書室長と結婚した。

当然、秘書室の様子は室長から社長に報告される。先輩秘書も気が抜けない。